

北の縄文文化回廊  
に向けたクラブ活動



# 通 信

第 23 号



シーニック de ナイト 2020

## 目 次

1. はじめに .....	2
2. 令和2年度活動一覧 .....	2
3. 各活動内容 .....	3～6
4. 関連活動 .....	6
5. 寄稿 .....	6～8

## 1. はじめに

令和2年度はコロナ禍のために思うような活動ができませんでした。令和3年度においても、先だって会員各位へ送付いたしました総会資料の通り、例年のような活動計画を設定できない状況にあります。

このような先を見通せない世相の中、報道等によって皆様ご存知の通り、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界文化遺産への登録勧告がなされました。登録は、縄文文化の素晴らしさが世界の人々によって認められることを示しています。これは、縄文文化を愛する人々はもちろん、北の縄文CLUB会員の皆様の応援とご協力があつてこそ実現できるものと思っております。より一層のCLUB独自の活動・清掃活動・植栽ボランティア活動や、他団体・関係機関と連携・協力しながら、世界文化遺産登録勧告を励みとして活動してまいります。

これからも、さらなる縄文文化の普及活動を行いますので、皆様のご協力をお願いいたします。以下、令和2年度の活動内容を報告します。

## 2. 令和2年度 活動一覧

活動日	主な活動	参加人数	活動場所
4月11日	大船遺跡清掃活動	8名	史跡大船遺跡
8月29日	縄文土器づくり	10名	南茅部総合センター
10月10日	縄文土器野焼き	12名	史跡大船遺跡
2月6日	シーニックdeナイト	15名	縄文文化交流センター

### (関連活動)

4月29日	シーニックパイウェイ北海道 函館・大沼噴火湾ルート 清掃・植栽	縄文文化交流センター
7月9日	北海道の縄文世界遺産の活用の在り方に関する懇談会	だて歴史の杜 カルチャーセンター
10月20日	保存活用委員会	函館市
10月31日～ 11月1日	南茅部地域文化祭・土器等出品展示	南茅部総合センター
12月4日	縄文遺跡の活用について	函館市
12月25日	広報誌「ほっかいどう」電話取材	函館市
1月24日	知るほど！なるほど！北海道 TV取材	

### 3. 活動内容

#### (1) 清掃活動

4月11日（土）、史跡 大船遺跡に集合して清掃活動を行いました。国道278号から史跡へ通じる道路の擁壁は、縄文時代に出土した土偶や土器の壁画で飾られています。この壁画にコケが生えて汚れていたのですが、デッキブラシでゴシゴシ。力が入ります。アッという間にきれいになりました。でも、疲れしました。次に清掃道具を持って遺跡内に移動し、ごみと馬やシカの糞を拾い集めました。史跡内外では春を告げる草花が芽吹きはじめていました。今年も大勢の史跡見学の皆さんに気持ちよく散策していただきたいと思います。来年度もまた、これらの活動を続ける予定です。



くっきり、はっきり、きれいになりました！

## (2) 土器づくり

8月29日(土)の午前10時から、函館市川汲町の南茅部総合センターを会場として、土器づくりを行いました。皆さん、手慣れたもので、思い思いの形を作りあげていました。



一心不乱、真剣に取り組んでいます

## (3) 土器野焼き

10月10日(土)9時から、大船遺跡の体験広場にて土器の野焼きを行いました。下準備として、薪を野焼きレーンの近くに運びます。去年は薪が湿って燃えが悪かったので、今年は皆さんの手を借りて工夫して乾燥させました。次に、薪に火をつけてレーンを十分乾燥させます。その後、土器に含まれる水分を除去するため、土器をレーンのそばに並べて下焼きをします。徐々にレーンの内側に入れ、何度か土器を回転させて、全体の水分を飛ばします。この作業はかなり熱くて大変です。それから本格的に薪を沢山入れて本焼きをします。焼き上がりは次頁の画像です。天候が良く、薪も充分乾いていたので、土器がきれいな色に焼き上がりました。



おきの中に土器を入れます。う熱っつ！煙っ！



きれいな色に焼き上がりました

今年は少し風が吹きましたが、皆さん火傷もしなくてよかったです。各々、焼き上がりに満足した表情。お疲れさまでした。また来年度も野焼きができるといいですね。

#### (4) シーニックdeナイト2020 (シーニックバイウエイ北海道函館・大沼・噴火湾ルート)

2月6日(土)に縄文文化交流センター前を会場に行きました。今年は雪があまり降らなかったもので、雪像作りはあきらめました。コロナ禍のこともありましたので、シーニックdeナイトができるということ自体を嬉しく思い、風もなくおだやかな月の光とやわらかなキャンドルの灯りで心も和みました。



祝！世界文化遺産登録勸告！

## 4. 関連活動

### (1) 取材

1998年発足以来、縄文文化の普及を目的として、土器づくりや野焼きなどを行っているほか、史跡大船遺跡周辺の清掃活動なども行っています。地元でのイベントに参加し、関連団体とのボランティア活動も行っています。



取材を受けた、会長と中條さん

## 5. 寄稿

### (1) 環境危機の時代に生かせ！ 縄文以来の智慧！

15年前、長いサラリーマン生活を卒業し、日本人がたどってきた精神文化の歴史を学び直しはじめた。すぐに「今の世の中、お金が神様になっている。それも欧米の神様のように唯一絶対神だ！」との思いを強くした。近年、南茅部の海に異変が起きている。天然コンブやサケ・イカが獲れなくなり、大型のブリが獲れるようになったのだ。このようなことは日本だけのことではなく、世界的に温暖化による異常気象が続発し、地球環境の危機が叫ばれている。その原因は人類のグローバル

な飽くなき経済活動が地球を破壊し尽くしているからだ。この状態を「人新生（ひとしんせい、地質学用語）」と呼び、完新世から新たな時代に突入した。この地球の危機の時代を救うにはどうすればよいか？

国連で決議されたSDGs（持続可能な開発目標）があり、日本をはじめ各国が連携して活動を始めようとしている。しかしグローバルな資本主義を放置したままではうまくいかない。日本列島では、縄文人やアイヌ、農漁村民の「入会（入りあい）」慣行など、私達祖先には村落共同体が共有して皆で利用する（だれかの所有に属さない）水源・森林・漁場などを、相互扶助の精神で英知を尽くして自分たちで管理してきた歴史がある。現在、地域内で経済が循環する（お金がまわる）方法を自分たちで創り上げる試みが過疎化社会において実現し始めている。市民による再生可能なエネルギーを用いた電力や、介護・保育・清掃・林業・農業などの分野でも既存のものとは違う共同組合化への活動が進んでいる。成長志向だけの経済活動を抑えて、**脱成長のもとに、水や森林・海・山などの共有資源を自分たちで管理する道を取り戻す**。そうすることによって私たちの未来が見え始めるだろう。この地球は誰のものでもない。皆のものなのだから！（追記 ご興味のある方は『人新生の「資本論」』（斎藤幸平 著）をお読みください。）（櫻井）

## （2）大船と垣ノ島

令和3年、大船遺跡・垣ノ島遺跡等の世界文化遺産登録へ向けての協議が着々と進んでいる（と思う、たぶん。— 5月1日現在）。改めて、各遺跡のある大船と垣ノ島の地名について紹介する。

まず、南茅部地域は北から岩戸（いわと）町・双見（ふたみ）町・大船（おおふね）町・豊崎（とよさき）町・白尻（うすじり）町・安浦（やすうら）町・川汲（かっくみ）町・尾札部（おさつべ）町・木直（きなおし）町・古部（ふるべ）町の10カ町に分かれている（海岸線での順）。いずれも「町」の読みは「ちょう」で、函館市と南茅部町との合併により大字名が町名になったものである。

「大船」という地名は、大船川という河川の右岸にあった小字名である（豊崎町の一部）。昭和16年（1941）に熊泊（くまどまり）などの小字を集合して、大船という大字名になった。語源は不詳で、もとは「ヲフ子（ネ）」・「ヲブ子（ネ）」と呼称されていたようだ。大船川に対してのアイヌ語で「オプ（銚または槍）」+「ネ（～のような）」+「ナイ（川）」または「ペツ（川）」かもしれない。下流域が直線的な流路なので銚や槍の柄になぞらえたか。船を橋の代わりにしたから、という説もある。漢字表記では大船・大船・大舟・小舟があるが、大字名・町名は大船を採っている。



大船川橋から大船川上流方面



大船川橋から大船川河口方面

垣ノ島遺跡は白尻町に所在している。「白尻」という地名の語源は、アイヌ語の「ウソル（湾内

の)」+「シリ（島）」とされている。島とは臼尻湾の東側に連なる島々で、大黒島・弁天島（この2島を双子島ともいう）・中ノ島・沖ノ島・オノドリ岩（トド岩）からなっている。弁天岬と総称され、現在は大黒島・弁天島・中ノ島は港湾整備によって陸続きである。巖島神社があることから祭神の市杵島姫命（≡弁財天ー弁天）に由来する。オノドリとは鶺鴒のこと。（食事の時に、食べ物をよく噛まないで飲み込む（まるこ呑みする）人を「オノドリのようだ」と形容する。）



沖ノ島・中ノ島



中ノ島・弁天島と巖島神社



大黒島の柱状節理



オノドリ岩（トド岩）

垣ノ島は小字名で、海岸から沖に向かって岩礁が連なっていることから垣根に見立てたとされ、かつては垣根シュマと呼称されていた。「シュマ」はアイヌ語では「石」という意味である。弁天岬南東方に流下する垣の島川河口付近にあり、国道278号によって分断されているが、かつては鳴岩という崖から連なっていた。現在は長磯という（長磯と呼ばれる岩礁は尾札部町にもある）。



鳴岩



垣ノ島（長磯）

アイヌ語での地名の付け方は土地の形状や動植物等の産出などからなされていることが多い。地名をつけるという行為は、その土地の情報を必要とする人々の共通する認識の上で成り立つものである。縄文人たちは、これらの土地にどのような名を付けていたのか。興味は尽きない。

（平神）

2021年6月30日 第23号発行  
 発行 北の縄文CLUB  
 連絡先 北海道函館市臼尻町 603-1  
 一般財団法人  
 道南歴史文化振興財団内  
 TEL 0138-25-5510  
 FAX 0138-25-5606